図書館だより⑨

２０１８年１月９日発行
那覇市立鏡原中学校図書館

新刊本

１２/25 までに登録した本は 924 冊です。あたらしい本をかりたらちゃんと期限内に返して、次の人にかしてあげてください。お願いします。

読書目標40冊を達成した生徒は現在、1年生は110人(53%)、2年生は91人(49%)、3年生は112人(57%)となっています。全体では313人(53%)です。達成した生徒にはちょっとしたプレゼントもあります、がんばってくださいね。

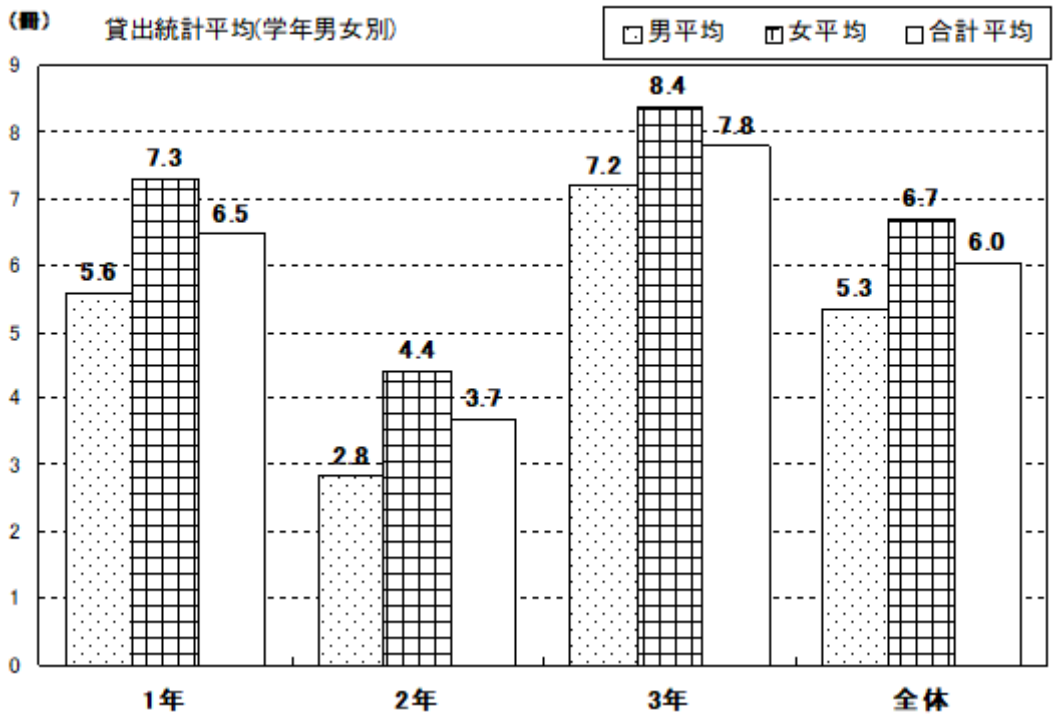
貸出状況（全学年）

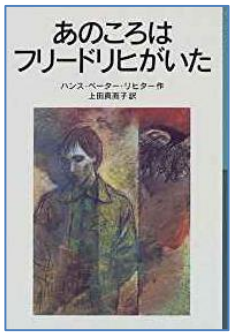
2017年12月1日 ～ 2017年12月25日

1. 学年別・男女別 貸出冊数

学年	1年	2年	3年	合計
男	565	241	713	1,519冊
女	781	441	830	2,052冊
学年合計	1,346	682	1,543	3,571冊

2. 学年別・男女別・一人平均 貸出冊数





今月のオススメ本

ハンス・ペーター・リヒター作

『あのころは　フリードリヒがいた』

昨年 12 月、翻訳家の上田真而子さんが 87 歳でお亡くなりになったとニュースになりました。ドイツ文学者である彼女はたくさんのドイツ語の児童文学を日本語に翻訳し、日本の子どもに届けてきました。1 番有名な本は、ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』ではないでしょうか。他にも、ドイツの昔話の『黒いお姫さま』やイリーナ・コルシュノウ『だれが君を殺したのか』…ドイツらしいその物語たちの中でも、特に忘れられない１冊は、ハンス・ペーター・リヒター作『あのころはフリードリヒがいた』です。

第２次世界大戦中のドイツでの、あるユダヤ人家族の物語…というだけで物語の「厳しさ」が察せられるかと思いますが、そのユダヤ人家族を眺めるのは、家族の隣に住む「ドイツ人の少年」です。ヒトラー・ユーゲントにも入り、あの当時のドイツの状況を知っている作者のリヒターは、加害者の１人として、主人公＝作者に近い、短い物語を淡々と積み上げていきます（エピソードの１つは「ベンチ」というタイトルで、教科書にも収録されていたようです）。この作品の中には、何の罪もなく被害者になる人たちの言いようのない辛さと同時に、切迫した状況下での思いやりのなさから加害者になってしまった「後悔」が描かれている気がします。実際、この本は３部作の第１作で、『ぼくたちもそこにいた』『若い兵士のとき』と続きますが、作者が段々と「物語」を書けなくなっていくのが読んでいくと分かります。リヒターはその後、筆を折って、二度と本を書きませんでした。

ユダヤ人側から書かれた『夜と霧』という本では、作者のヴィクトール・フランクルは「悪いユダヤ人、善いドイツ人もいたよ」というような事を書いています。また「一般論で生き方を決めてはいけない。一瞬一瞬をその都度考えて、苦しくても自分の答えを出すべきだ」というような事も（難しい本なのできちんと要約できていませんが）書いていました。…少年だったリヒターは、あの時の熱に浮かされたドイツの中では、無力で、何も変えられなかったのかもしれません。それでも彼は、将来の彼のために、どう考えて、何をしなくてはならなかったのか？　子どもだった頃、読んだ当時はただただ衝撃を味わっただけだったのですが、年を経るごとに重くのしかかる内容で、忘れることができません。

（文責：うえはら）

★ 毎月第３日曜日は「ファミリー読書の日」です。
ご家庭で、親子で、本に親しむ機会を作りましょう。 ★

１月の読書目標

『心に残る１冊を　見つけよう。』